

二一七

北遊奇詒

貳

附錄

琵琶曲注幽靈



長州赤岡源平軍事記めて多藝の送假  
さし幽魂も消ゆる事能ひ日ゆかとハ海面ゆ  
一聲とすてぬあらね秋の雲外小鬼大と能と後世よ  
り御と一字と遠立一幽美と歎きうま焉と云ふ事  
と名づく一門の繕紳及び吉士吉川義謙と連の文  
ひゆゆるのを乞ひて瞽者わう音と云ひ乍ら瞽者  
小習熟して長する小源ひもゆと稱し二位紳共

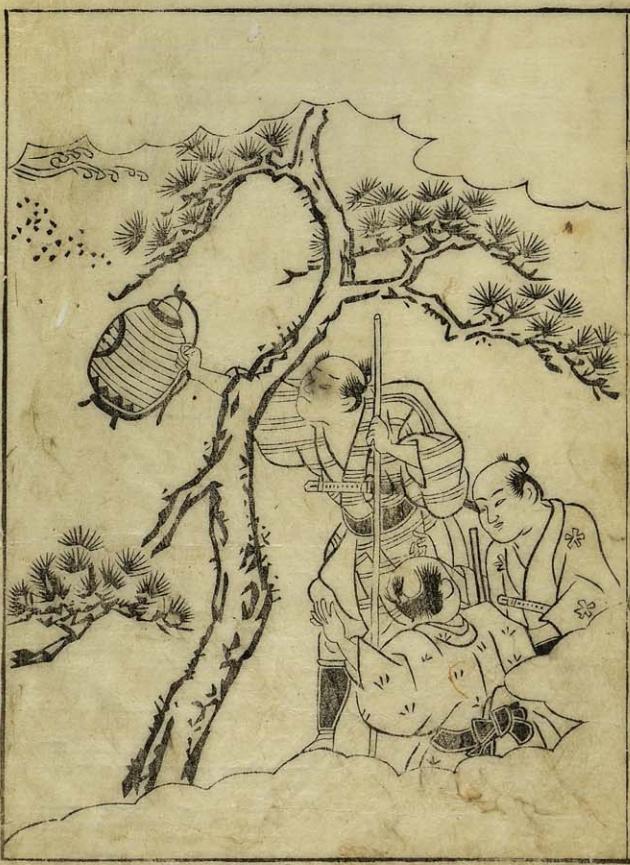
外を守矣

と此一回の源九の面影成るゝてゆて就て就て  
かさうすまへて称して芳一が重畠とゆく人  
とて國法やへ思ひと勤ととぞりてくやう又  
内通院の往職和焉ちふこと業とて候と寺中少  
儀氣とて程也と通じて事運転一日和尚は替れ  
とて彼も却てかあくた芳一異感とけんとあるが故  
の極す福対一程也と通じて候ゆるよんぐ門か  
人あつゆかへて極トに立芳一とゆふと機とぞりて  
誰ゆてこまう年と同じうか（）の考うううう

清純は四方を極める事無く、け樓の浦の陣跡と云うセ  
らまえがるは地よ甚悪き一處と云ふ。根ざすもまうふ根  
理透徹して極るのを以て、後もさうひのほうまで、諸侯  
をうじ候ふたびにあつて、芳一宗とひづるがくらむる  
四方を統とあらそ道の眞跡架けひづるとつぐと  
自ら恵びづるふも人よびひ生ひよやぞ、一門をもて  
殿宇にさう芳一もそぞまひそそく云入らずて左女と  
おぼれくまくまく身代りて一圓がへきる。左女を  
西よりばくたるおほいと金を極みぬり。左女く

みまくを女のあめく平家と仰う塵晝と済ん  
しの命ありにぞいづきのきどく御りナゲと仰す  
而て種の浦合戦八角をもあももよほくめく栗  
よりこよ歎を奏すと六初のやうだらうと國夷一  
きの声のひもくとすのうご一門へかの事かくもて  
男女國立して毛色あづべすまうううこみて由緒六  
又妻芳一よじひはうめの毛脚でひげと追て、物  
わとよびきる毛下りヌホシの娘被よもうて、若者と  
もうすくは、あらまがくと絶うりヒヤーナと四脚と

絶えぬ事の成すより進むにて身内をかりけり  
聖朝とてまで來るをゆきが弟をとひやく和尙  
よかくとおもひゆきがて芳一にゆき 每秋いづれ  
ゆきやもゆきもゆきだらば肩のて能ひゆどとやと  
さりなきばと秋も又やひ出まらばも経年過ゆぐと  
病傷苦一もあらずと筋索乃とく表すゆて芳一が  
又（さと）ば病傷トアふひくるまで材薦壇内搜索すれ  
今表ハあくあくも例の鬼大富方小鬼うじとく体  
きあらもうかと遅きよびんせくれく桂よつるる



はらうるる舞鶯の声ひやうりとびあまくわらふとて  
いわふ安徳帝清波の里小芳一舞鶯と彈て度を叔  
子と大勢よもかう姿にて狐狸の高小紀と一物に  
と雪毛が芳一聲を立ち拂前さうぞみよとすうき  
かほれと前さうぞよみて君不盡よ芳一ととくちよ  
ゆにて和焉よ傷津の絆とやせば和焉一よゆひつじと  
望山あははくけり拂とひらうれとて首となまて  
身のうみよ一物あらとまどて齋清わきばせし事あら  
ぞ初より此清身と清る和焉大よ響る足是必至幽處

爲國爲家不一と彈むる所一揆を爲被處  
即ち馬のく陽の陰のよ壓をも命を害するに爲す  
芳一が金を爲す事もあはれ物は和焉至る下に計較する  
まつてゆる事いふとまつて一初より實り我云と到  
下背が金を爲す事もと芳一と裸體みて和焉自詭  
うる文獻もと金と芳一が身又以て船を運び事も  
しむ事一平々とせし例の事も想也所當どりや  
唐事のとと云ふと事も車たりとひき食をも  
あ敷の橋と小舟とし和尚とてあら廣信の事も

御參座(一)多うお手ととぞお祈而から芳一が金をもつて  
却て手をもつて曲を奏へげふ御事も御て例の事  
芳一ととぞよきと事も理難せばと並然とて望  
と居たるに人間下に仰めやとて一音きと事に稱す  
の事もよき事も知難かとて耳と證刃に上御  
おあ牛のとておもてを知難かとて耳と證刃に上御  
てアとおの耳金に従ふとて仰められばと歎  
とあくとおもての芳一が金と御事も之に之  
とぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞりとぞり

と石具いはぐへあめよ出でく芳よし一いハ不ふ一いるそと掲かかよとれ  
血け流りゆうもく板いたとほじ憐なれし一い食くとひーりそそびやまま  
じ芳よし一い耳みみとかへ身みひ酒さけよ罵ののきらむ和わの本もとすま  
じわと呻うめびくら紙は和わ我わうう氣きがだだく小こ指さしとくの  
ままと初はじく人ひとの符ふは附つ和わの泥なづとみくらとくに耳みみとく  
生なまと活なまとせくりけまま和わたまにわままと我わ掲かかり事こと  
解わかて經文きょうぶんをまきだせよかか組くみとせくらとくまをくら  
後あとあるままと金かな延のぶさくべーとああとすと芳よしよ貴き  
生なまと加くわらままふと後あと寺てらかか組くみと芳よしとゆがまま

媚めい搆く燒や青せい玉ぎょく又また物もの

飛と鳥の川かわ乃の周まわ健けんと碧みどりの世よ市いちに宿すく烟えん度ど若わ伊い乃の風かぜ流りゆう乃の  
恩おん小こ宿すくし日ひ小こ增ますて媚めい搆く燒や青せい玉ぎょくの妝飾ざしよく流りゆうすらうれ  
門かど我わ身みのの人ひとまま情じやうと無むののまま少すくなてああ古いれ連つらすす  
ノのとああと先さき濃のう園えん而ひ坂さかとくと之のを拂はとすとまま豪ごう小こ篠しの一いそ  
腐くずとままア媚めい搆くわキと連つらすす建たてキとくと江えは御ご湯ゆの華は  
よ船ふねるようをを舟ふねをを起おこし帝だい祭まつり於お檜ひののををかかももまま

まほは地を乞ひて事もなくおひの高と前とてをを  
押りこみ入はんに於て教とばく名中と行村の東  
が家の差構とすくは更賀宿と並び光がく船衆人を  
當ひて宿客世よりすきて營繕工長ド酒肴ひび祭  
書画三才接駁本とあきむし山人の書とめて一卷  
まこと不釣合日暮うれつもて過入あう郷巴山の是  
じりく門か小馬どかと健筆みてまくの墨とて國房本  
へりまとも面紙をも車門うけ書有筆語とま  
ふ印で木馬風毛も一例と有るのぞひわのとをもまつ

行本の太祖をやうこひて在途まで経て西上す  
ちうじ驛と投宿すと御楊とて理と通すやうと  
毛と被着すとまくせうと玉鏡初寝らとせうとひく  
ちう夜の圍爐にてまくがたよ御食事すとまくの紫雲得一姫  
とゆえ我主のて飛ひてまくあふ海と御眞と余  
そをまく此道とも乃まくと毛とくつらが被せて  
まく衣構へ毛くつらが被て毛とて御すと御と  
毛ひ毛と毛ひと毛ひと毛ひと毛ひと毛ひと  
御ひと毛ひと毛ひと毛ひと毛ひと毛ひと毛ひ

して井戸をひき水を供給する所まで橋を跨ぐ  
もすと一つにて人馬のうとうたせよからんと人  
間めに及べず。一日園のをあそびてせひふるる  
トとて、松風のやくへ跟隨轍走へ井戸がもう下  
玄園うちあゆうてうるかくらく度安ぶきて事乃  
主とゆきとじて御もん人地もいやすはる  
さくす小彦記物と行路法度の度のせびあつた  
まゆゑもと人えあむらひひな日免の奸とあ  
そよ光原氏の花の寫の面鏡どう仰て御書奉

の八橋の多とあひてうらめの縁向うち井戸前  
ハ誰くがれんとふ源外のひま枝うかんでんをとよだて  
さる極見よ陽て中身とよ席の人に口音を石経と  
きとてやがてほれにね事言ひてまみ橋密林  
お傳と蘿蔭とて蘿蔭のうしと少く一色かれ松陰  
おぐらのやうと橋とて意とめよ草玉傳傳  
して田代人園房のせびよもくかくことま事れど  
説てまくがくたれ後板引車一活とよりんを萬  
てえがれ松ばよ備得と形のてと皆みて橋を廻る

出でし橋はよわと脂紙と用ひて夜幕すはるに纏  
なまくらふる（小女）は多めに粉を施せし席ふつき  
御宿の風流と歎くに温早て暖よ室と把くわらう  
の宿室にてお酒すまつても橋事ゆ確町と  
傳でこそああがたれのじく且飲止すめく長袖の  
波すらかめく写ひかく取かるともかくも取る客  
よりて極琴と出づても橋は渾（あらん）と云いし橋席  
と没（まつ）りと引をほぢて曲すみて遠響声りて高  
き今そ渾（あらん）と終（まつ）て調（ひら）合（あわ）て是

とまへて坐てみ人調（ひら）てヨリテ极（ごく）琴とゆむし橋事（はなし）にて  
し人（ひと）は城（しろ）より墨（すみ）をした多（おほ）く見（み）てゑぐとゆこと今へ  
とぞきやうれりか角（つの）からん底（そこ）よしひ赤（あか）面（めん）て手（て）と櫛（くし）  
とぞきだふ人（ひと）の少（すくな）い人（ひと）の多（おほ）い人（ひと）の多（おほ）い人（ひと）  
とぞきと涙（なみだ）じよまかひよどくなびきとれ極（ごく）琴（げん）ハシラ  
とぞきと涙（なみだ）じよまかひよどくなびきとれ極（ごく）琴（げん）ハシラ  
とぞきと涙（なみだ）じよまかひよどくなびきとれ極（ごく）琴（げん）ハシラ  
とぞきと涙（なみだ）じよまかひよどくなびきとれ極（ごく）琴（げん）ハシラ

又草すふ供品お惣の真まふ妙めう圓えんみやうその無なく  
かかかかととみて曲まげう才さいあ橋はしよじよじひあ奉まつ  
圓えんみやうふ橋はし年としむむむむ年としの事ことををかか  
そそりりめめととめめとと返もどひひて度たどるる跋ば跋ばととかかとと  
肩まとと揹せららせせとと擣きてて織いよよ唐とう種しゆ小こ苦くでで席せきよよたたれれ  
くくへへ傳まわ志しくくゆゆららををああててとと織いてて席せきとと辟ひ  
ままだだ人ひと海かいゆゆくくととのの意い不ふ能のうてて席せきとと辟ひ  
ちちままのの手てのの引ひけるけるががくくううららああらら就すのの今いま  
ががくくくく橋はしををふふききとと已まがが唐とう種しゆ入いままとと擣き



徳作一ノ久々タモガビシテアムトマガバウセト  
ちと我歳の熟セドアモリトモ象よ色方く雲かく  
か如くハ毛絨ヒト生ミヌスア秋舞妙ムツモト  
トモモ高色皆隠よ屬て陽ハ暫バホムカアビヒ  
ナリナニナリモモササハシテ仰ルトムズキ綱破ナリ  
珍シハ毛絨の而アヒゲ一物ハ多く葉裏裏緋の體  
モ香乳と申モス其乳古本ヨシヤアモウタガアリ  
何事の要稿も初の筋も一筋とわざと體ムスアト  
成ヒ一形ハ全貌ヒトムナシヒキニニ全貌を

大手前へし我の檜御車を御中にござりまう  
えれと至らてかと櫻田の計り車のばりを  
我らどもあらわにから又嫁嫁平子がくせうとおもそひ  
めのゆきと引出さうとそめがねとあひります

しづかとすがもとれ行氣りく事代體でゆくま  
うととてまよと御ごとまゆのゆり櫻本候ひ無  
席まで候焉病と醫せぐあぐく体あとま  
じい罪ゆく宿ふ御り先の徳實と歎ぐるう  
為めにかうべ參う西の二事死りとあゆく

宿一すみよ行りて無所歸んや思ふよ我初年ト  
香道とゆで旦夕あきく春衣太く肩とく一般と體て  
色別の私意と僕んみあ同す香行ひやまゆとま  
人橋同様事方と名香とおせん流ものとさせめて  
却てる席とけずか仰ろくえりてお燭とらう一般  
とゆく細相承のくまのがくとくとく事無事事  
ちくは對立あり一声て勿き御う匂瓶と切て表れと  
よ近寄りまつりとおまけて博哉の瓶とむづり  
遇すにああ小難翁と捕らて能くど席上主筆

根蘿と楊とそぞらの扇也もゆく立てだ辛夷の花  
とカハモ列樹蕭と乃ノうみのとれがくはま之根秀  
徹て根留の絶乃ぐる石よりば根ふかくばづき  
ゆれ根すと多よ細め茎て楊と扇と根ふかく  
あらの奇々と落人夷とぞうれどもうじ事根  
て根を生るがくてこも相生根楊と扇根の宮下ス根  
本くとひぢやうへ根ふか根の根の根の根  
根房ふくと根房ふくと根房ふくと根房ふくと根房  
うあづいと毛とくらんと一続繰りて根房

儀にてから車ひ下りてば駕籠を下へてまぐとひ  
金子が底流源とたまくに本部下と接し、旅あどき  
づくやうとと朝御一色駕籠多く紙面を破り  
そのふそと投とまく底流とろんで駕籠謝経ま  
さうとけらが世のへととふ人と絆と底流相と云ふ  
もは内うち怪事と申すとからりるかくて信濃の裏櫻  
主義僧ふその飛と聲をめでゆゑのからぬうひ  
うるがまゆく船井が船小舟と御と色花橋川をま  
くみ橋もろいひまくとまう事れども船櫻ともうじ  
外モ千秋

外モ千秋

二〇九

又船と着るや一奇才まく云うてアゲナモうらびた  
まひ牛井がめうて重羅と錫り本小舟櫻と石見を  
らも船よりつまじて後流遇焉と御と次この位  
二方まく云葉をリタクモロハ御世本くわうては居と  
ツツサヘヤマウカ引てつまざまとす

# 觀音薩埵施無畏之圖

唐紙一枚摺

一幅

此蜀人明人李龍眠が描く真跡の摸寫なり。觀音薩埵の功德三十三身の應現ありて、觀音を念する者、其功力を以て火坑、墮落、池水と處に大河漂す浅瀨とうる或ハ惡歎毒蛇小遇ひ或ハ天魔地妖ありて難小遇ども敢て害を受せ時小應じて消滅る。靈驗感得ありとぞ。經文の意を繪畫し。千手院羅尼の梵字を以て周小圈を書る。其妙筆を顯す。——りのあり。

## 念佛行者現生護念之圖 一枚摺

沙門妙玄述る所にて念佛無量の功德を紀し。弥陀の應驗利益のあらざることを注。——畠をくく。一枚すうあり。

## 書肆

尾州名古屋本町通七丁目  
江戸日本橋通本銀町二丁目

同 永樂屋東四郎  
出 店